山茶椀と白磁碗について

柴　垣　勇　夫

はじめに

日本陶磁における中国陶磁の模倣は、すでに平安時代前期の中国越州窯製品を写した猿投窯や尾北窯等の灰釉陶器（白瓷）および畿内・東海産の緑釉陶器（青瓷）にみられるところであるが、その後にも日本陶磁史上に大きな影響を及ぼす時期が何度かある。中でも平安末期から鎌倉時代にかけての東海地方にみられる中国陶磁の模倣は顕著で、特に瀬戸窯の中世施釉陶器は南宋から元代の白磁や青磁類を多くの器種に写している。しかし、近年、11世紀中葉から12世紀にかけては、南宋様式の白磁類が輸入中国陶磁の大半を占めることが明らかにされてきた。さらに、東海地方、特に猿投窯を中心に白磁四耳壺や白磁碗・皿類の模倣がさかんになることが指摘されるようになった。(注1)

10世紀代から11世紀初めにかけては、官貿易の停止によって中国陶磁の輸入は停滞するが、11世紀に入って宋商人の来航が相次ぎ、私貿易化した日宋貿易が大宰府を中心に活発化した。その結果、新たな中国陶磁の輸入が増大し、西日本を中心に九州や畿内へかなりの量もたらされた。この新しい陶磁器は、やがて灰釉陶末期の猿投窯やその周辺の窯業生産地に大きな影響をもたらすようである。(注2)

かって、筆者は、灰釉陶末期の椀や初期山茶椀の中に口縁を肥厚させた特殊な口作りをみせるものがあることに注目し、中国白磁の玉縁口縁碗の日本における模倣品と考え、その型式分類をしたことがあるが、その内容は、単に初期山茶椀出現期の一つの指標としたにとどまる。その後、中世における中国陶磁と日本陶磁との関係がとりざたされるにつれ、山茶椀の最も普遍的な器形そのものについても、中国白磁碗写しとする考えも出されるようになってきた。(注3)

こうした経過を踏まえて、東海地方に顕著な日常雑器である山茶椀への中国陶磁、特に白磁碗類の影響はどのようなものであったかを考えてみようとするのが本稿の趣旨である。(注2)

1.　11～12世紀の山茶椀

現在、東海地方生産の中世陶質椀類について、山茶椀の語が慣用化されている。その語源については、通常「山にころがる粗野な碗」であり、『延喜式』にいう山坏・小坏の系譜をひくものであろうとする考え方が一般的である。しかし何時からのものを山茶椀とするかについては、諸説ある。(注4)

学史的にみて、陶磁史の中へ「山茶碗」の語を採用したのは、赤塚幹也氏である。通常いうところの「山茶盌」は、『延喜式』巻七・神祇七にある践祚大嘗祭用に各国から調納される諸器のうち、三河・備前の項にいう山坏・小坏にあたるとし、山坏の語が歴史的に合うという観点から東海地方に分布する碗形態の雑器生産窯を「山坏窯」と表現し、その概観と変遷を考察した。この昭和10年代の考えは、その後訂正され、戦後は「山茶碗窯」の表現をとるようになった。(注5)その理由は、山坏・小坏は須恵器を指していう用語であること、山茶碗は、東海地方で藤四郎焼・行基焼と呼称する山地に散乱する粗野な碗であるが、平安中葉から鎌倉末葉にわたる灰釉を施したものに始まり、次第に無釉となり、中間で大形化し、遂に高台を省略する変遷をもつものをいうとしたことによる。その後もこの考えは引き続きとられ、灰釉の有無を問わず平安中葉に現われ(注6)(注4)

た開いた碗形態で、酸化焼成された新器種を山茶碗とし、その形態変化の延長線上にある碗形態をすべて「山茶碗」と把握したのである。

次に山茶椀の編年観を最初に組みたてた一人の田中稔氏がいる。(注7) 田中氏は、椀・皿に山坏・山皿の名称を与え、各器形の様式分類を行い、浅鉢型で三角型高台をもち籾殻痕がわずかに付着するものから順次、高台・口縁部・胎土などの変遷をあげ6様式分類をした。(注8) 最初期のものを広久手E様式ととらえ、通常の山茶椀（無釉段階からとする一般的な山茶椀）より一段階古い灰釉陶末期に山茶椀の出現期をおいている。

一方、久永春男氏は「行基焼」の語を編年用語として使用し、器形としての椀・皿に山茶碗・山皿の語を用いた。そして、田中の広久手E様式を平安朝様式（のち瓷器）第三型式とし、釉の薄くかけられていることを重視し山茶碗と区別している。すなわち、釉の有無を様式区分の一つの要素としていることを推測させる。行基焼は3型式に区分されたが、これに過渡期段階を加えた編年が組みたてられ、その後の知多半島、渥美半島での窯業生産跡の編年観の基礎をなした。(注9)

さらに、各窯業地における生産器種の組成を重視し、その総体としての型式分類により編年体系が組みたてられてもいる。(注10) 常滑窯編年などがそれである。この場合の中世陶としての椀形態の出発点は、その地方にさかのぼりうる祖形がないことにもよるが、(注11) 12世紀初めの無釉で大形の粗雑な椀であり、これ以後の椀形態を山茶椀としている。山茶椀は、愛知・岐阜を中心に静岡・三重にも分布する。これらの各地域ごとに器形変遷に差があり、各地域ごとの編年作業が進められつつあるが、その作業の中心器種は、大勢として無釉、粗雑な椀形態であり、古代灰釉陶の名残りとしての施釉された山茶椀が地域的にみられるものの、無釉かつ大型化した椀・皿をもって山茶椀・小皿と呼称されるのがこれまでの一般的な状況であった。

しかし、近年、山茶椀の型式分類が詳細に行われるにつれて、特に瀬戸地区において、灰釉陶器の系統下に属する椀と新器種としての山茶椀の初現形態を求めていった結果、これまで灰釉陶末期とされていたものの中に山茶椀の原形があり、11世紀中葉以降の新器種をもって山茶碗と呼称することを提唱する説が重要視されるようになった。

すなわち、「瀬戸古窯址群Ⅰ」において、(注12) 藤沢良祐氏は、山茶椀を4段階10型式に分類し、第Ⅰ段階の第1・第2型式を灰釉山茶碗(注10)の語をも使用して古代灰釉陶器の中に新たに出現した山茶椀とその後出のものであるとした。藤沢氏の主張は、山茶碗と灰釉椀とは明確に区別しうるもので、決して灰釉椀から（灰釉）山茶碗へと型式変化をたどるものではないとし、灰釉椀と山茶碗の器形のちがいを体部（山茶碗は深く腰部に丸味を帯びる）、口縁（山茶碗は若干外反する）、高台（山茶碗は先端の尖った高い断面三角形である）から検討し、新器種の登場が折戸53号窯期の新しい段階にみられるというのである。(注13) そしてこれを山茶碗第1段階第1型式と設定し、同類の小碗タイプがセットとなって供膳形態をなすとした。

この意見に対しては、楢崎彰一氏によって反論があり、藤沢氏のいう新器種は、折戸53号窯期と東山72号窯期に限定されるもので、その原形は越州窯青磁深碗にある特殊器形で山茶碗に直接結びつかないとした。しかし、この東山72号窯期には華南系白磁碗と対応するタイプの碗が生まれ、山茶碗に転換していくとし、新器種の登場があることを容認した。

また、楢崎氏、斉藤孝正氏によって進められた猿投窯灰釉陶器編年の再編成では、(注14) 両氏はあくまで編年基準を灰釉陶器の器種構成におき、新器種とする藤沢氏の灰釉山茶碗も灰釉陶器編年の

中で扱っている。そして中世猿投窯の初現を東山（HG）105号窯期とし、無釉かつ口径の大型化した段階の椀形態を山茶椀と考え中世陶器の出発点ととらえている。(注15)

両者の山茶椀についての理解は、前者が特定地区（瀬戸）における新器種とその生産量の多さに着目し、その後の器種変遷の祖形という点において型式分類し、そこに中世的世界の萌芽をみるのに対し、後者が、従前の灰釉陶生産における編年基準として、一窯式期に生産された器種構成に重点を置いた編年観に基づき、無釉化し、椀・皿（小椀）・鉢の3種が定形・定量的に基本的な生産品となる段階をもって山茶椀窯の出現ととらえている。このちがいが、年代観、型式変化ともに整合性をもちながら、編年基準（段階）で大きなちがいをもたらしている。この問題は、「山茶椀（碗）」なる器種の出発時点のとらえ方の問題、解釈のちがいに帰せられよう。いまどちらが正しいのか検証できないが、以下にみる白磁碗との比較の中で、考えてみようと思う。

2. 白磁碗の形態と山茶椀との比較

11世紀から12世紀にかけて輸入された中国白磁椀類については、大宰府跡出土品を中心に横田賢次郎・森田勉両氏によって詳細な分類がなされている。その全体は同論文（『九歴研究論集4』）(注16)によるとしここでは、その大分類によって当時輸入された白磁碗・皿をながめてみる。

（1）白磁碗・皿の各種

主要な器種は、第1図の如くであるが、白磁椀・皿について次のように要約されている。すなわち、Ⅰ期（8世紀後半から11世紀初頭）は、白磁椀Ⅰ類と越州窯系青磁の時期。Ⅱ期（11世紀中葉から12世紀初頭）は、Ⅰ期とⅢ期の過渡期で、Ⅰ期と同様に出土量は少ないが、白磁椀Ⅱ～Ⅵ、Ⅶ類および同皿Ⅱ・Ⅴ・Ⅵのみで形成された時期。Ⅲ期（12世紀から14世紀中葉）のうち、第1小期（12世紀中葉から13世紀初頭）は、同安窯系青磁および龍泉窯系青磁椀Ⅰ類（Ⅰ-2，Ⅰ-4）の割合が多い段階。第2小期（13世紀中葉）は、白磁が極端に減少し、青磁椀が大半を占める時期。なおこの期以降、白磁類に口はげがみられる白磁Ⅸ類が登場する。

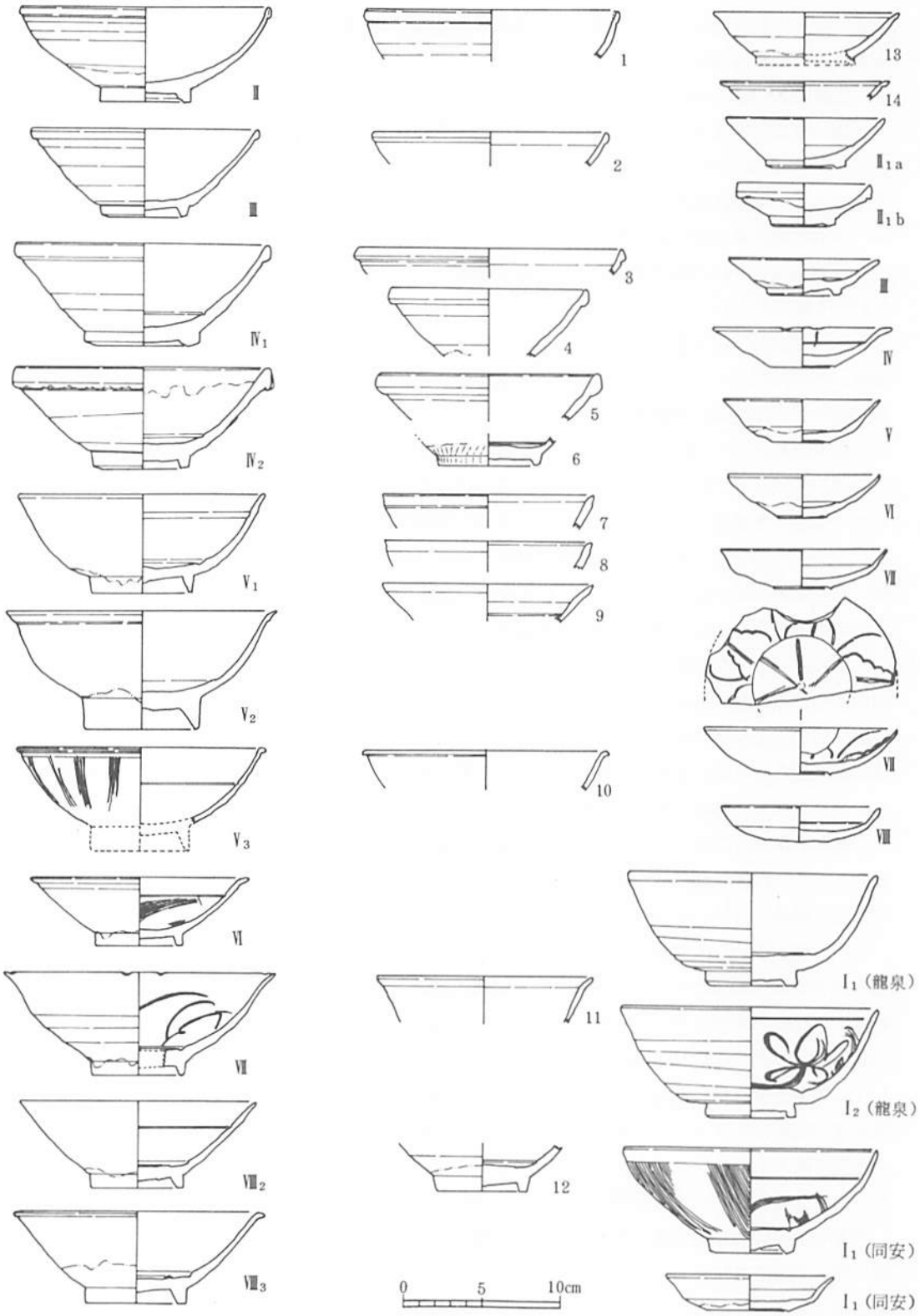
以上の白磁類のうち、白磁碗Ⅰ類は、邢州窯産とも、定窯系ともいわれるグループで、純白に近い釉調で胎土も精良なものである。碗Ⅱ～Ⅳ類は、玉縁口縁状のもので、そのうちⅡ類は黄白色の釉調であり、Ⅲ類以下は、灰白色ないし灰緑色がかった白磁類で、Ⅴ類の直立ないし外反する口縁をもつ碗類も同系色である。白磁皿Ⅱ類は碗Ⅱ類と同系統であるが、Ⅲ類以下は多様な色彩を呈する。

さて、横田・森田分類に記述されていないが、釉調・器形からⅤ－1類に属するもので、口縁外面が面取り状の巾2～3ミリの垂直面を呈するものが京都（平安京）から出土しており、これをⅤ－1′として第1図(№7, 8, 9)に加えた。第1図に加えた№1～14は、当館へ寄贈された赤塚幹也氏の採集品であるが、これらはすべて京都市中京区西大路通丸太町付近で昭和前期に採集したと記載されているものである。但し表採品であるので、時期はまったく限定できない。なお、Ⅴ－1′類に類するものは、京都市三条大路側溝Ⅳ溝内でも出土しており、やはり11～12世紀代の白磁碗であることを示している。(注17)

九州大宰府跡出土例から、これらの輸入時期は、11世紀中葉以降といわれるが、他の地方では何時ごろから搬入されているかを次にみてみよう。

（2）平安京での出土例

京都市内での発掘調査例は、近年増大し、編年も詳細に行われるようになってきた。本稿が対



第１図　白磁碗・皿形態各種（左列・碗；右列・皿但し下４ケは青磁碗・皿；中列および右列上２ケの館蔵資料以外は注１－２文献より）

象としている白磁類について、特に東海地方の灰釉陶器ないし山茶椀と伴出している例をいくつか摘出してその様相をながめてみる。

i) 内膳町SK18（10世紀末～11世紀初）出土例(注18)

土坑一括例であるが、白磁碗Ⅱ類およびV類（V－2a）と共に灰釉椀が出土している。土師器編年から10世紀末から11世紀初めとされるが、出土の灰釉椀は、東山（H）72号窯期のものと考えられる。猿投窯編年では11世紀前半ごろのものとされている。(注19)

ii) 三条西殿三条大路側溝Ⅳ溝（11世紀前半）出土例(注20)

土師器編年から11世紀前半とされる一括遺物群で、越州窯青磁の削り輪高台の稜皿や、壺片らしい削り輪高台のものが出土しているほか、白磁碗Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Vおよび白磁皿V類の出土が知られる。この伴出品に、東濃地方産とみられる虎渓山1号窯期（東山（H）72号窯期併行）の小形皿、深椀、大平鉢底部、広口瓶があり、猿投窯編年の11世紀前半代の遺物群と一致する。但し伴出の縄状把手付水注片は一時期下がる。(注21)

iii) 左京四条三坊十三町SE531（11世紀中葉）出土例(注22)

井戸531掘り方一括から白磁碗Ⅲ類の玉縁片のほかV（－1，－3a）類の小片が出土している。ここでも百代寺窯期とみられる大平鉢片がある。本遺構は出土している近江型黒色土器の編年から11世紀中頃と考えられていて、猿投窯編年とほぼ一致する。

iv) 左京五条三坊十五町井戸C,D（11世紀中葉）出土例(注23)

共に出土土師器から11世紀中葉ごろと編年されているものであるが、井戸Cでは、白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁碗やV類の碗、白磁皿Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ類と共に11世紀末から12世紀初めに編年される初期山茶椀系の小椀（東山HG－105号窯期）が出土している。ここでは、これらと共に青白磁梅瓶の口縁部が出土していて、注目される。井戸Dでは、白磁碗Ⅲ・V類の口縁片およびⅣ類の玉縁口縁碗底部と、白磁皿Ⅱ類の一群が出土し、初期山茶椀片（東山HG－105号窯期）が伴出している。また肩に波状沈線のめぐる褐釉四耳壺片があって、平安京での数少ない出土例といわれている。なお、伴出の内黒の近江系黒色土器や瓦器椀は、断面三角高台で、口縁部がやや外反気味のものとなり、百代寺窯期や初期山茶椀にみられる特徴と同様な形態をみせている。(注24)

V) 左京四条一坊SE8（11世紀末）出土例(注25)

井戸の埋土中から「寛治五年（1091）五月十三日」の墨書銘のある須恵器鉢が出土した井戸で、掘り方や堆積土の遺物に差がないことから短期に廃絶した井戸で、出土遺物は一括性が強いとされる。白磁碗Ⅱ類およびV（V－3a）類と猿投系初期山茶椀（東山HG－105号窯期）が井戸掘り方から出土しており、ほぼ11世紀末という紀年銘に一致する。なお、この白磁碗Ⅱ類の玉縁口縁碗について、亀井明徳氏は、九州出土例からみて11世紀前半ぐらいから登場するといい、そのあと福岡県武蔵寺経塚出土タイプの白磁玉縁口縁碗（白磁碗Ⅲ類）が11世紀中葉から12世紀前半代の早い時期に輸入されてきているという。(注26)

vi) 白河北殿北辺E12層（12世紀前半）出土例(注27)

京都市上京区の白河北殿に接する地域の単純土層から出土しているものに、無高台上げ底で口縁の外折する白磁皿Ⅳ（－1・a）類、平底で口縁の内彎する白磁皿Ⅵ（－1・a）類がある。また四耳壺器形と考えられる白磁壺口縁片があって、この時期に白磁四耳壺類が平安京に登場していることを示している。伴出の猿投窯産とみられる小皿は、東山（HG）61号窯期のものと考えられ、12(注28)

世紀前半期に編年できる。この層序は出土土師器から平安京Ⅳ期古段階（12世紀前半代）とされ、猿投窯編年と一致する。

vii) 白河北殿北辺SD11中層（12世紀末）出土例(注29)

溝SD11の堆積土層第5層から出土したもので、報告書では土師器皿の編年から中世京都Ⅰ期古段階（13世紀前半代）とされていたが、その後須恵器編年等の検討から12世紀末と修正された。(注30) 白磁碗Ⅳ類の玉縁口縁片のほか白磁碗Ⅷ類、白磁水注の注口部および同安窯系青磁碗が出土している。伴出の山茶椀については、執筆者は知多系山茶椀で12世紀第2四半期としているが、形態上からみて、12世紀後半代のものと考えられる。なお、同安窯系青磁碗（注16文献Ⅰ1b類）が12世紀末葉の土師器と伴出しているが、大宰府や北摂津では、龍泉窯、同安窯系青磁類は、12世紀中葉の土師器と伴出しているという。

以上のように11世紀前半代から12世紀末にかけて、白磁碗・皿の各種が大量に輸入されてきている。これらの時期別諸相を表にすると表1の如くである。

時期	平安京遺構	白磁碗類 Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ Ⅷ Ⅸ	伴出中国陶磁	東海地方椀・皿類
1000	内膳町SK18，三条大路側溝	○ ○ Ⅳ1 ○ ○ 皿○		(灰)東山72号窯期
1050	左京四条三坊十三町SE531,	○ ○		(灰)百代寺窯期
	左京五条三坊十五町井戸C,D	○ Ⅳ1 ○ ○ 皿○ 皿○ 皿○	(青白磁梅瓶) (褐釉四耳壺)	東山(HG)105号窯期
1091	左京四条一坊SE8	○ ○		〃
1100	白河北殿北辺E12層 SE22	○ Ⅳ1 ○ 皿○ 皿○	(白磁四耳壺)	東山(HG)61号窯期
1050	〃 SE30	○ 皿○ 皿○ 皿○		
1200	〃 SD11中層	Ⅳ1 ○ ○	(白磁水注) (同安窯系青磁碗)	東山(HG)101号窯期以後

表1　平安京各地点出土白磁類

すなわち、白磁碗Ⅷ類は12世紀後半代になって現われ、Ⅸ類は12世紀代にはまだ出現していないかのようである。

次に、当地方でこの期の調査が行われている尾張国府跡の例をみてみよう。

（3）尾張国府跡の出土例

尾張平野部において、中国陶磁と国産土師器、灰釉陶器、山茶椀の伴出する遺跡として発掘調査が継続的に行われてきたものに尾張国府跡遺跡がある。遺構に伴い出土した中国陶磁は極めて少なく、また小片類であるが、当地方への中国陶磁搬入の様子を知るには、格好な遺跡である。

i) 宗形地区SK07出土例（第2図1）(注31)

礎石建物の想定された付近の土坑から土師器小皿および山茶椀と白磁皿Ⅶ-1b類が伴出している。山茶椀の形態は東山（HG）61号窯期の形態をとる。12世紀前半期とみられ、土師器小皿もこの期にみられるロクロ糸底切離しのものである。

なお、礎石建物に付属すると思われるSK15からは、「乾元大宝」（初鋳958年）16枚を入れた

鎮壇具的な意味をもつ白色陶質土器の盤口形瓶が出土しているが、当SK07とは時期的にやや差があり過ぎ、当遺構の時期を上げることはできない。

ii) 宗形地区SD20出土例(注32)（第2図2）

11世紀中葉の百代寺窯期の灰釉椀・皿、緑釉皿・花瓶片、緑釉円塔のほか、東山(HG)105号窯期、同101号窯期の山茶椀・小皿および土師器杯・皿類が出土しており、11世紀中ごろから12世紀後半期の遺物群である。これらと共に小片ではあるが、白磁碗Ⅷ－2類が出土している。いずれの時期に伴うものか判断材料がないが、12世紀代の土師器、山茶椀の多い溝である。なお、この付近からは正八角形の印面に『珎冨』と陽刻された銅印が出土している。

iii) 政常地区SD24, SD26出土例(注33)（第2図3，4）

宗形地区と同様、尾張大国霊神社北辺にあたる地区で、宗形地区に西接する。東西溝からの出土例で、SD24では、常滑系複線三筋文壷片と土師器でロクロ成形の小皿と共に、白磁碗V－4a類の小片が出土している。三筋文壷および土師器小皿は12世紀前半代のものと考えられている。SD26では、ロクロ成形土師小皿と初期山茶椀・小皿類(注34)（東山(HG)105～61号窯期）が出土し、11世紀末から12世紀前半の溝とみられているが、これらと共に白磁玉縁口縁碗（Ⅳ類）が出土していて、11世紀末から12世紀前半ごろには、当地方にも各種の白磁碗類がもたらされていたものと考えられる。

iv) 政常地区SD27出土例(注35)（第2図5）

この溝では、5本の粘土紐を組んだ水注の把手片と白磁玉縁口縁碗（Ⅳ類）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類や龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1a類が伴出している。粘土紐把手は、11世紀中葉から12世紀中ごろにかけて多くみられる水注の把手で、龍泉窯青磁が伴出していることから12世紀中ごろのものかと想像させる。

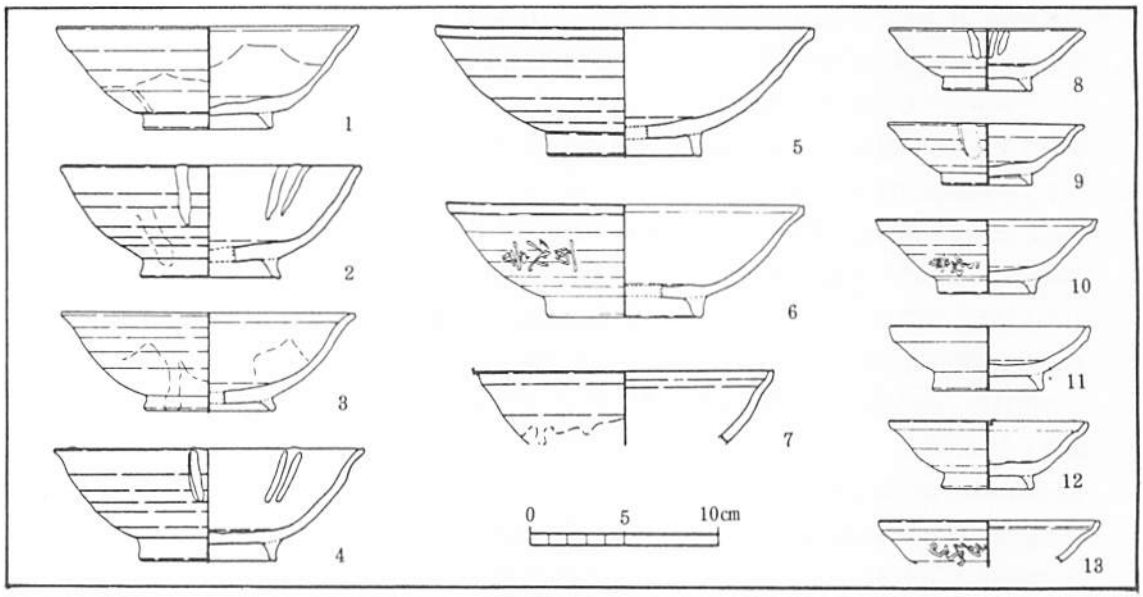
この尾張国府跡調査では、宗形地区が比較的多く遺構出土の遺物が認められる。そのうちで、土坑SK140出土遺物には、白磁類が含まれず、10世紀前半から11世紀前半代の灰釉椀・皿・瓶および須恵器の玉縁状口縁鉢(注36)や、土師器椀・杯・皿類が伴出している。同じくSK143では、少量の出土遺物ながら11世紀前半の東山(H)－72号窯期の灰釉輪花椀や灰釉椀・皿があるが白磁類は含まれていない。

以上、少数遺構の出土例であるため、速断はできないが、11世紀前半代までの時期には白磁類

尾張国府跡遺構	白磁碗類 Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	備考	
宗形地区 SK 07						皿○		東山(HG)61号窯期	12世紀前半
〃 SD 20							○	百代寺窯期～東山(HG)101号窯期	11世紀中葉～12世紀後半
政常地区 SD 24				○				東山(HG)61号窯期	12世紀前半
〃 SD 26			○					東山(HG)105～61号窯期	11世紀末～12世紀前半
〃 SD 27			○					青磁碗・皿（龍泉窯）	12世紀中葉

表2　尾張国府跡各地点出土白磁類

第２図　尾張国府跡出土白磁類、山茶椀類（左列；白磁等　中列；土師器　右列；山茶椀など）
1；宗形SK07　2；宗形SD20　3；政常SD24　4；政常SD26　5；政常SD27（注32～35文献より）



第３図　百代寺窯出土灰釉椀、椀、小椀類（注37文献より）

の尾張平野への搬入はほとんどなかったか、極めて少量だったと推測させるものである。なお、各遺構出土の白磁類をまとめると、表2の如くである。

京都および尾張国府跡出土の白磁碗・皿類の出現時期についてみてきたが、京都では、11世紀前半には、白磁Ⅱ～Ⅴ類の各種が出現しているのに対し、尾張国府跡推定地では、現在までのところ11世紀前半期での白磁等中国陶磁の出土はみられない。

尾張平野への白磁類の搬入は、11世紀中葉以降かと推測されるのである。

さて、白磁碗各種の中でも、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類は、この東海地方の灰釉陶末期の椀・皿、さらには初期山茶椀にその影響をおよぼしているという。以下にその様子を窯跡出土品によってながめてみよう。

（4）灰釉椀、山茶椀にみる白磁の影響

i）百代寺窯にみる椀形態

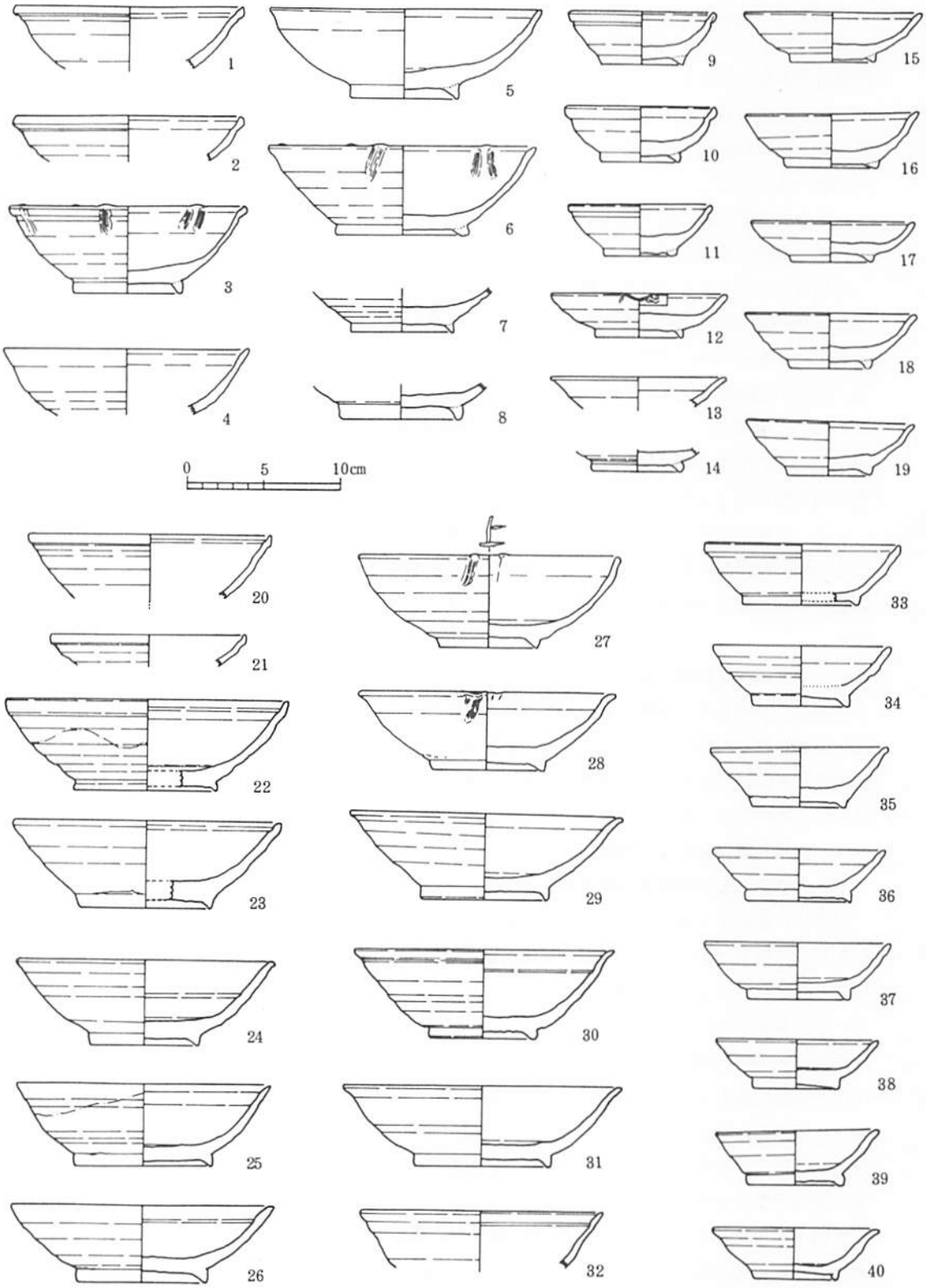
瀬戸市広久手に所在した百代寺窯は、灰釉陶（白瓷）最末期に編年されるものであるがここから出土した遺物には、次の特徴をもつ器種があり、それ以前の窯跡の生産した器種組成とはちがって、かなり限定された器種の焼成を行い出していることがいわれている。(注37)

すでに述べたように、藤沢氏はこの前段階にあたる広久手C－1，3号窯にみられる三角高台、外反口縁、体部の球形状の丸味という3つの特徴をもつものが、新器種として登場し、これが山茶椀の祖形であり、灰釉山茶碗と呼称し、山茶碗第1型式とした。しかし、三角高台の形状は、すでに折戸53号窯期における三日月高台退化現象の中に見出され、(注38)口縁外反は、むしろ灰釉陶器最盛期の外反形態を踏襲した反り具合を示していて、(注39)初期山茶椀の巾広に大きく外反させる形態とは異質である。

これに対して、百代寺窯にみる椀形態は、直線的に口縁を引き上げるもの（第3図1，2）と、口縁端部巾1㎝ほどを大きく外反させるもの（第3図3，4）の二種が登場している。さらに面取り口縁椀（第3図5，6）と形態分類されているもの、受け口状口縁椀（第3図7）とされているものが少量生産されている。小椀形態にも直線的に口縁を引き上げるもの（第3図8）と大きく外反させるもの（第3図9）の二種と上記受け口（第3図10，11）、面取り（第3図12，13）状のものがある。これらのうち、受け口や面取り口縁椀については、白磁玉縁口縁碗（白磁Ⅱ類）を基本的な模倣対象とし、口縁端部には白磁碗Ⅴ1′類の垂直面をもつ部類の影響とも考えられる形態を示す。一方、直線的な口縁をもつ椀については、従前の灰釉椀の変化現象としてとらえることが可能である。灰釉椀形態は、広久手C－3号窯段階＝東山72号窯期に最末形態を示し、百代寺窯期には消滅していくという意見が支配的になりつつあるが、口縁、高台等の特徴をとりあげれば、東山(HG)105号窯期まで存続している。(注40)なお、腰部が張り、口唇部を外反させる深椀形態が折戸53、東山72号窯期に存在するが、これについては、越州窯系青磁深碗の模倣であるとする意見が多い。(注41)これに対し、百代寺窯や広久手F谷窯にみられる口縁外反形態の椀類は白磁碗Ⅴ－2類やⅦ類の影響ともみられる。

ii）東山79号窯にみる椀・皿（小椀）形態

本窯は、白磁玉縁口縁碗の写しとみられる玉縁状口縁椀が最初に発見された名古屋市天白区所在の無釉の初期山茶椀焼成窯である。この表採品には明瞭な折返し口縁をもっていて白磁碗Ⅲ類や白磁皿Ⅱ類の模倣とみられるものがある（第4図1～3，9～11）。一方、直線的に口縁を引



第４図　東山79号窯（1～19）、南山８号窯（20～40）　出土玉縁口縁状椀・皿および山茶椀・小皿

き上げる椀・皿（第4図4,12,17）や大きく外反させる口縁をもつ椀・皿（第4図5,6,18,19）が量産されており、しかも口径が17㎝を越す大形のものが顕著である。なかには、三角高台の畳付部分を平坦にしたものが存在する（第4図6,7）。 前述のように直線的口縁椀は灰釉椀からの形態変化とみられるものであり、すべて無釉である。外反口縁椀は、百代寺窯期から出現する白磁碗Ⅴ、Ⅶ類の影響下にあるとみられ、高台の形状は、Ⅶ類ないし、玉縁口縁の白磁碗Ⅱ～Ⅳ類の高台作りを意識しているようである。

ⅲ）南山8号窯にみる椀・皿（小椀）形態

本窯は瀬戸市南山口町に所在する東山（HG）105号窯期併行の遺物が表採されている。

百代寺窯にみられる面取り口縁椀、同小椀（第4図20,21,33）のほか、灰釉漬け掛けの受け口状口縁椀（第4図22－外面は玉縁状）や、口縁の折返しはないが、若干膨みをもたせた口縁形態を示すものがあり（第4図23）、やはり白磁Ⅱ・Ⅲ類の初現的な写しと考えられるものが出土している。直線的口縁椀（第4図24～27）、外反口縁椀（第4図28～31）には、三角高台が大半を占める中で、二等辺三角形状の径の小さい高台（第4図24,27）や、三日月高台の名残りをみせる畳付部分の丸いもの（第4図29,39）があって、灰釉陶最末期の直後に編年できる、（無釉の）山茶椀最初期の椀・皿生産窯といえる。

また、小椀の2種（第4図34～36；第4図39,40）は、白磁皿Ⅱ-1a類の体部を直線的に作るものや、白磁皿Ⅲ類または碗Ⅵ類の外反口縁の影響をうかがうことのできるもので、本窯の椀皿類が、輸入白磁の模倣とはいい切れないまでもその大きな影響下にあって生産されたことを物語る。

このように輸入陶磁の影響が猿投窯周辺に再び活発化してくるのが、11世紀中葉から末葉の時期とみることができる。なかでも、最も形態をよく写しているものが玉縁状口縁椀である。通常の椀・皿類には、形態の細部に中国陶磁の影響をみることはできても、全体の器形は白磁よりもやや鈍重なものが大半である。そうした中で、玉縁口縁を明確に写して生産している意味はよく判らない。その手がかりを生産窯とわずかな出土例ながら消費遺跡からさぐってみよう。

3. 白磁玉縁口縁碗類の模倣

（1） 古窯跡出土の玉縁状口縁椀類

玉縁状口縁椀生産窯は、かって猿投窯東山地区、瀬戸地区および猿投窯黒笹地区の3地区数基が知られる程度であったが、その後尾北窯、東濃（美濃）窯、知多窯にもいくつか知られるようになった。(注42) 以下にこれを概観してみよう。

ⅰ）猿投窯瀬戸地区

百代寺窯（第5図1,3）、広久手E谷窯（第5図7）、南山12号窯（いずれも百代寺窯期）、南山8号窯（東山（HG）105号窯期）（第5図4,6）に面取り口縁および受け口口縁の玉縁状口縁椀・小椀（皿）が出土している。(注43) 特に百代寺窯の面取り口縁はかなり多く生産されている。また、南山8号窯には前述の如く外面を玉縁状に内面は受け口状にしたものがある。

ⅱ）猿投窯東山地区

東山105号、79号（第5図16,17,22,23）、55号窯（いずれも東山（HG）105号窯期）および東山61号窯に玉縁を明瞭に写した椀・小皿が出土している。(注44) 中には粘土を折り返して玉縁を作っているものや輪花のものが認められる。

iii) 猿投窯黒笹地区

八和田山古窯1～5号窯(KG-41～45号窯)(注45)では、全形を知りうるものが鉢1点を含む8点(第5図10,13,18,19,27,28)あり、写しの精から粗へという変化をみせる。白磁碗Ⅱ～Ⅳ類の写しが灰層から出土していて生産窯の限定はできないが、2号(山茶椀5基中最古)、1号窯での生産が多いと考えられている。ここでは、白磁皿に対応する小皿類の写しは出土していない。やや巾をもつが東山(HG)105号窯期の中に編年される。

iv) 知多窯石浜2号窯(注46)

知多半島北部に属する東浦町石浜に所在する古窯跡で、壷、甕、鉢片を併焼した山茶椀窯である。椀・皿の形態からは12世紀前半代、東山(HG)61号窯期併行かと思われる。本窯から玉縁状口縁椀が1点出土(第5図26)している。形状は、八和田山1号窯にみられる白磁椀Ⅳ類の模倣タイプである。

v) 尾北窯の出土例

最近、小牧市を中心とした尾北窯での出土例もいくつか知られるようになってきた。篠岡1号窯では表採品であるが、口縁折り返しの白磁碗Ⅱ類タイプを写したと思われる椀(第5図15)および百代寺窯等にみられる面取り口縁の小椀(第5図5)各1点が確認されている。篠岡(S)1号窯式期(百代寺窯期併行)として編年上の標式窯とされている。12世紀第1四半期に編年される篠岡80号窯(注47)では面取り口縁椀片(第5図2)がある。さらに篠岡(S)1号窯式期(百代寺窯期併行)に編年される篠岡96号窯(注47)第3次窯および表Ⅰ層から、玉縁状口縁小椀(第5図24,25)が計4点出土している。灰釉の漬け掛けされているものが1点あるが形状全体は、すべて東山(HG)79号窯にみる玉縁状口縁小椀(皿)と同形態で、猿投窯では初期山茶椀窯に出現するタイプのものである。(注48)

vi) 東濃(美濃)窯の出土例

可児市の谷迫間1号窯は、美濃灰釉陶編年で、丸石2号窯式期(百代寺窯期併行)に位置づけられるものであるが、面取り口縁の輪花椀と同じく小椀(第5図8)が出土している。平皿とされるものにも大小の面取り口縁をもつが、百代寺等に比較してやや浅い。谷迫間2号窯は、美濃山茶椀窯編年で第Ⅱ期(12世紀前半)の標式窯とされるものである。(注49)八和田山古窯などの受け口状の形態を内面に残す玉縁状口縁椀(第5図12)が出土していて、猿投窯と同様、初期山茶椀に伴うものであることをよく示すものである。そのほか、多治見市内において、百代寺窯式期から東山(HG)105号窯式期に併行する時期の2～3の窯跡から玉縁状口縁椀の出土が伝えられている。特に赤坂1号窯からは(第5図11,14,21)玉縁状口縁椀9点、同小椀16点、同皿3点と、1基の古窯としては、東山(HG)79号窯(表採品ながら20点近くある)と同程度の濃度の高い焼成個数があったことを示している。編年的には美濃山茶椀窯編年Ⅰ期の西坂1号窯式期におかれている。猿投窯東山(HG)105号窯式期に併行するが、焼成器種や高台形態には百代寺窯式期の名残りが強い。(注50)(注51)

以上のように玉縁状口縁椀類生産窯は、これまで6地区20基以上の古窯跡が知られるようになった。これらは、百代寺窯式期から東山(HG)61号窯式期にかけての生産が主で、しかもその大半が鉢や広口瓶、壷類を少量ながら併焼している。

(2) 玉縁状口縁椀類の諸形態

かって玉縁状口縁椀についてⅠ～Ⅲ類に分類したが、改めてながめてみると以下のようである。(注3)

Ⅰ類

面取り口縁を呈するもので体部は丸みをもつが、小椀のそれはやや直線的である。主として百代寺窯式期の時期を中心として(11世紀中葉)、瀬戸地区の各窯、尾北窯の篠岡1,80号窯東濃地方の谷迫間1号窯での出土が知られる。

Ⅱ類

口縁内面を内彎させ、外面をやや肥厚気味に作る受け口状の口縁を呈するもので、外観は丸みをもつ玉縁状を呈す。玉縁口縁直下はなでにより段差をつける。百代寺窯、南山8号窯、八和田山1号窯、赤坂1号窯にみられる。

Ⅲ類

体部はⅠ，Ⅱ類と同様丸みをもつが、口縁形態に明瞭な玉縁を作りだすタイプで、口縁端内面を外反気味にひいた上で内彎させ、作り出した肥厚気味の口縁直下にヘラ等による沈線をめぐらし口縁端面を突出させた玉縁を作っている。東山79号窯や篠岡1号窯には粘土の折り返しを明瞭にみせ、中国白磁碗の模倣であることを如実に示しているものがある。(注3ではⅡ・Ⅲ類をⅡ類とした。)

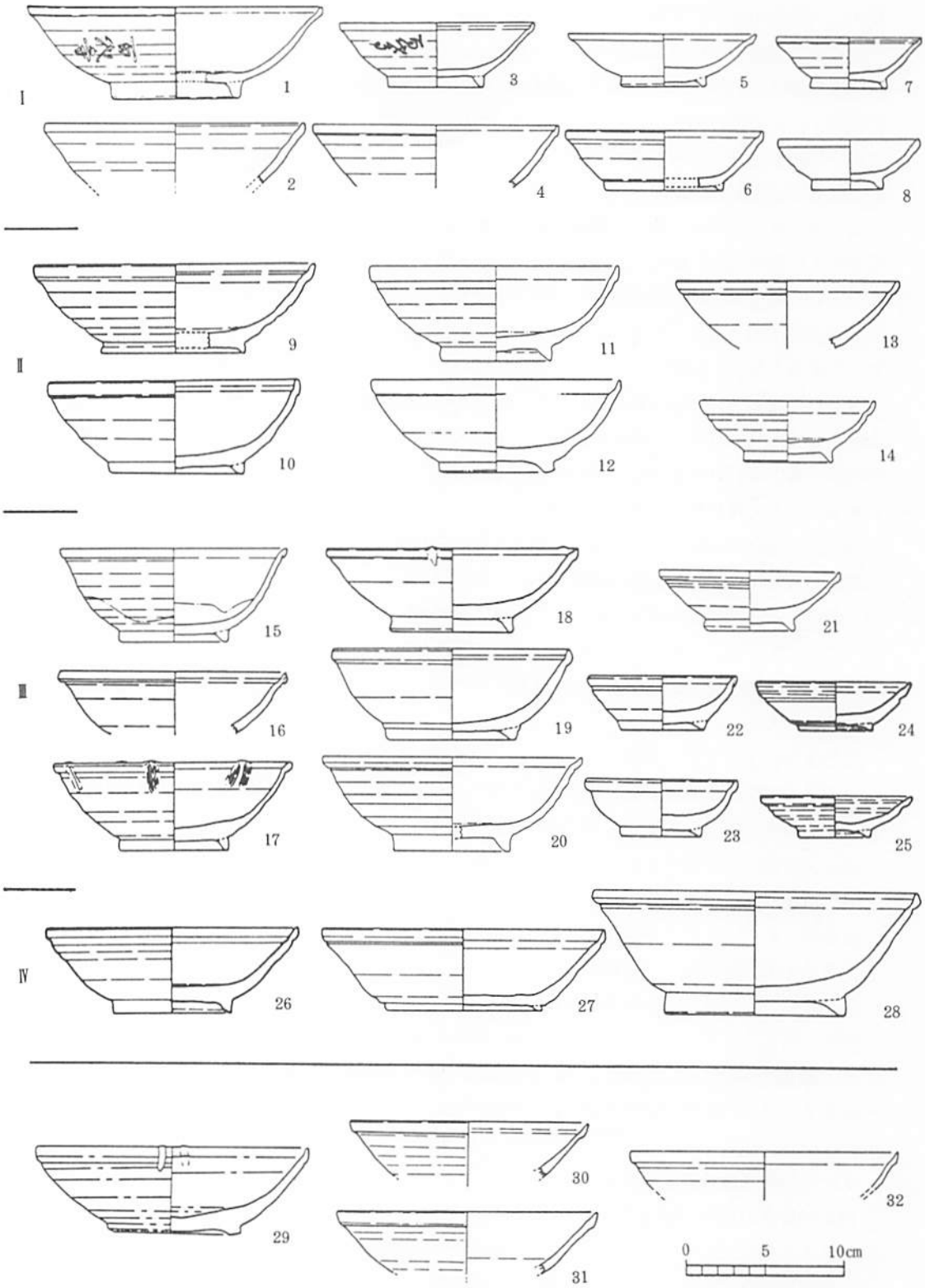
Ⅳ類

体部の丸みがなくなり胴部を直線的に引いた上でⅢ類の口縁形態をさらに明瞭に作り出したもので、八和田山1号窯、石浜2号窯にみられる。(注3ではⅢ類とした。)

これらは、口縁内面形態にやや違いをみせるが、外形は明らかに中国産白磁玉縁碗各種を写している。すなわち玉縁の形状からみて、Ⅰ類は先述の如く白磁碗Ⅱ類の模倣が始まった時期と考えられ、Ⅱ類は、白磁碗Ⅱ類の口縁を意識的に大きくみせた形態と思われる。(注52)Ⅲ類は、白磁碗Ⅲ類を忠実に写しつつ、白磁碗Ⅳ-1a類の影響を受け突出部を作るものも登場している。Ⅳ類は、白磁碗Ⅵ-1bおよび玉縁の肥大化したⅣ2類の模倣と考えられ、初期山茶椀窯の中でも後出の山茶椀を伴うことから、12世紀第2四半期ごろの生産かと思われる。白磁碗Ⅳ類の大量輸入がその頃から始まったことを示すかも知れない。

(3) 消費遺跡出土の模倣玉縁状口縁椀

次に、消費遺跡からの玉縁状口縁椀の出土をみてみると、現在のところ、玉縁状口縁椀Ⅲ，Ⅳ類のものが、尾張平野部の3か所からみつかっているにすぎない。**1**つは、尾張国府跡推定地で、大割Q地区のSK 113からⅢ類が出土している(第5図32)。猿投窯東山地区産と思われるもので、伴出の無釉小皿は東山(HG)61号窯式期頃のものと考えられる。(注53)**2**つ目は、岩倉市稲荷町の御土井廃寺(白鳳期瓦出土)の例で、上層から単独で完形の輪花をもった玉縁状口縁椀(Ⅳ類)が出土している(第5図29)。(注54)高台には籾殻痕があらわれていることから前述の国府跡とほぼ同期と考えられる。この地には国衙の字名が残り、尾張国衙をこの地に比定する説もある地域である。これまでの調査ではその徴証はないが、白鳳期の古瓦の出土は顕著で、寺院址の存在は確実のようである。平安後期以後の顕著な遺物はこれまでみつかっていないが、調査が小部分であり、寺院廃絶後に有力階層の集落が存在した可能性もなくはない。**3**つ目は、名古屋市守山区の天白元屋敷遺跡出土品である。包含層からⅢ類の東山地区産と思われる玉縁状口縁椀片が2点出土(第5図30,31)(注55)し注目される。本遺跡は、庄内川左岸に接した古墳時代から江戸時代の複合遺跡で、



第５図　玉縁状口縁椀各種（下段のみ集落跡出土、他はすべて古窯跡出土）（注42～51, 53～55文献より）

庄内川舟運の川湊の可能性もあるといわれる地域だが、現在まで目立った遺構は検出されていない。なお、玉縁状口縁椀の付近から白磁碗Ⅲ類の口縁やⅣ1類の底部片が出土している。玉縁状口縁の形態は、11世紀末に編年される東山（HG）-79号窯出土例に酷似している。現在のところ少数例で、この種の椀がどのような供給地向けなのか速断できないが、前述のⅢ・Ⅳ類の出土例は、白磁碗の尾張への輸入量がさほど多くない段階に、尾張平野の国衙ないし有力階層を対象とし生産された可能性が強い。

これまで検討を加えてきた白磁椀の影響を受けた尾張部の末期灰釉椀や山茶椀は、かって中国製青磁・白磁を写した緑釉・灰釉陶器が国衙機構管理下のもと、貢納品として、さらには国内交易品として各地へ運ばれたのに対し、律令制弛緩から院政々権への移行期に出現した在地向け交易雑器の量産品と考えられる。平安京では、11世紀以降日常雑器としての食器類は木製品（漆器類）が主流となり、土師器や瓦器椀、須恵器は減少し、高級食器には日宋貿易の活発化により輸入された中国製白磁が使用されたという。(注56) 輸入陶磁の増大に伴い、日常雑器の地方からの調納はもはや必要がなくなり、在地向け椀類として無釉化の拍車が進んでいく中で、白磁碗類の模倣が在地領主層あるいは院政々権下の在庁官人層の要請下に進行していったものと思われる。そうした背景の中で、特に写しを重視して製作されたものが玉縁状口縁の椀類であったのであろう。なお百代寺窯式期には瀬戸地区では東濃地方と同様の良質な細かい陶土を用い、灰釉漬け掛け製品を焼成していたのに対し、次の東山（HG）105号窯式期の同地区南山8号窯では砂質の陶土を使用し厚みのある無釉の椀焼成に転化している。猿投窯では折戸53号窯式期以後、砂質な胎土が目立っているが、東山（HG）79号窯（105号窯式期）に至り、無釉の厚みのある椀に転化する。窯体の大形化、窯の爆発的な増加など山茶椀窯の開始が大きな窯業集団再編への動きを如実に示しているといえよう。

三筋壷や経筒外容器の併焼や、やがて61号窯式期から101号窯式期にかけての猿投窯や知多窯での瓦生産や四耳壷の焼成など院政期から鎌倉政権誕生期にかけての山茶椀窯は大きな社会変化の中での特殊品生産を続ける。13世紀に入るとこうした各種併焼窯は姿を消し、山茶椀専業窯と特殊品生産窯への分化が各地で進むこととなる。

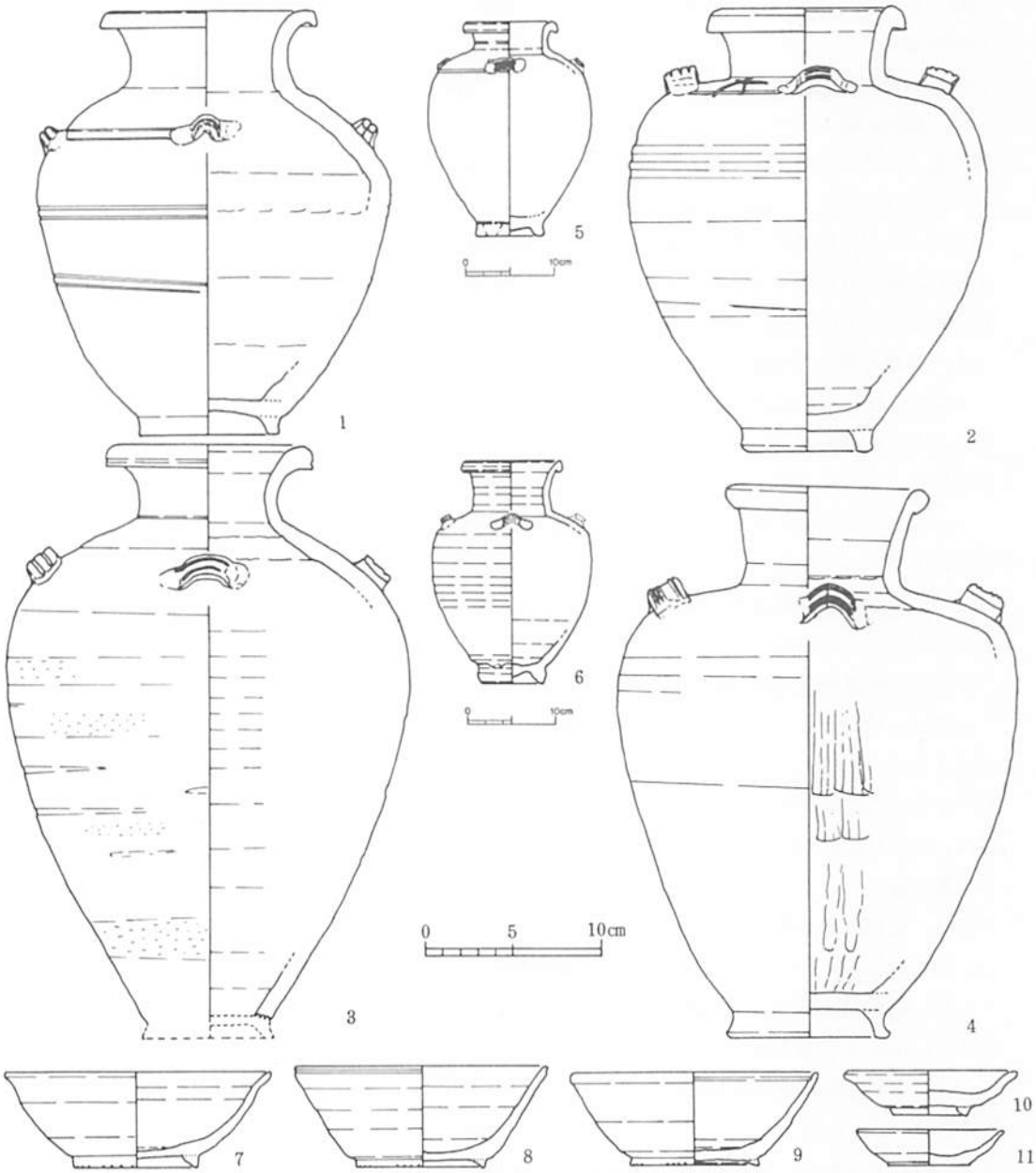
4. 白磁四耳壷とその模倣

最後に、この地方で生産された白磁四耳壷の模倣品のいくつかを紹介し、時間差をもちながら各窯業地で中国陶磁写しの製品需要に応じ生産していたことをながめてみよう。

白磁碗類と共に輸入された白磁四耳壷は、経塚・墳墓からの出土例が多く、青白磁合子とともに特殊な性格をもつものである。一部に中国南部の褐釉四耳壷の影響をみせながら、この白磁四耳壷を蔵骨器的容器として模倣することが東山・瀬戸・美濃須衛等猿投系諸窯で12世紀前～中葉に始まる。愛知県陶磁資料館所蔵資料に初期の白磁四耳壷を写した四耳壷が4点ほどあるので以下にながめてみよう。

（1）白磁四耳壷の形態分類

白磁四耳壷の器形分類は、平出紀男氏による、Ⅰ－A～E，Ⅱ－A～Cの合計8形態分類がある。(注57) これを要約すると、Ⅰ類が主として断面形が卵形で、頸部の比較的短いもの、後出のⅡ類は、肩が張り頸部が長く、口縁が頸部から外反気味のもので、高台が部厚い。そしてⅠ，Ⅱ類はそれぞれ長胴化の傾向によって分類されている。これらのうち蔵骨器等に使用された年代の明ら



第 6 図　白磁写し四耳壷各種および瀬戸窯四耳壷生産開始期山茶椀類（5. 6 は白磁四耳壷（1/8）、注 57 文献より）

かなものは、12 世紀中葉以降のもので、12 世紀初めにさかのぼる年代のものは今のところ出土していない。なお、亀井明徳氏は、その初現について、11 世紀後半代の可能性を説いているが、(注58) 現在のところその徴証はない。

（2）猿投窯東山地区生産の四耳壺（第 6 図 1）

胴部に明瞭な三筋文が付されたもので、楢崎氏論文にすでに紹介され12世紀第 2 四半期に位置づけられている。(注59) 鳴海（NNG）65 号窯（細口下 1 号窯）や東山（HG）-83 号窯（八事裏山 1 号 C 窯）東山（HG）-101 号窯に類品が出土しているが、本例はそれらの中でも古式なものとみられる。

口縁や高台部に白磁四耳壷Ⅰ類（第7図5）の影響をみるが、胴部や耳形態は褐釉四耳壷の系譜が推測される。

（3）美濃須衛窯産の四耳壺（第6図2）

最大胴径を胴部上半にもつ白磁四耳壷Ⅰ類のうち松山・石手経塚タイプに類似するもので紐輪積み後、内外ともロクロ回転なで成形され、均質な器壁を作っている。高台部畳付部分の外面を斜めに欠きおとし、白磁四耳壷の特徴的な作りを精巧に写している。口縁は頸部から厚めに外反させるのみで、部厚な端部を形成しているが、美濃須衛窯産には、端部を丸く折り返している、より白磁壷に近い例もあり、それらに比べ、本例はやや後出的である。白磁壷の出現期からみて、12世紀後葉～末のものかと思われる。

（4）産地不明の四耳壺（第6図3）

本例は、胎土や口縁端部、耳装飾などから東海地方の山茶椀窯系統の製品かと想像されるが、現在のところ産地は判らない。口縁部は美濃須衛窯例と同様に部厚なものとなっているが、全体の器形は、白磁四耳壷Ⅰ類で京都栢杜出土の大形タイプをより細長くした形で、やや砲弾形となっている。高台部は欠損しているが、付高台と推定される。胴部は輪積みによって起る凹凸を横方向に丁寧にヘラ削り成形し、内面はなで仕上げしている。四耳は板耳でヘラ沈線を2本ずついれる。猿投や美濃須衛窯産とはやや異質ながら、長石粒の目立つ胎土である。美濃須衛窯例より更に後出的ながら白磁四耳壷Ⅰ類の模倣例であろう。

（5）瀬戸窯産の灰釉四耳壺（第6図4）

本例は、いわゆる古瀬戸様式成立期の灰釉四耳壷で、輪積み成形後、内面は下から上へかきあげるようにヘラ削りされ、外面は回転ヘラ削り仕上げをし、高台近くまで全面に灰釉を刷毛塗りしている。口縁は折り返して頸部に密着させ、玉縁状に仕上げ、頸部内面にも施釉している。四耳は、型押し装飾の板耳を付す。全体に白磁四耳壷Ⅱ類（第6図6）の古いタイプを模倣しており、瀬戸窯において、新しいタイプの中国陶磁の模倣が始まっていることを示すかのようである。本例は、瀬戸市南山2号窯出土の灰釉四耳壷Ⅰi類に酷似する大振りなものである。このタイプは、藤沢編年にいう山茶椀第5型式の山茶椀を伴う(注60)もので、12世紀末葉に編年される。

なお、第6図に図示した山茶椀類（第6図7～11）は、灰釉四耳壷初現期の併焼品と思われるもので、南山6号窯表採品である。すべて緻密な胎土でいわゆる均質手と呼ばれるものであるが、藤沢氏によれば山茶椀第5型式のうち古式（Ⅰa類・第6図7，10）のものと新しいもの（Ⅰb類・第6図8，9，11）に分類される(注60)。この前後関係と理解されている山茶椀2種は、本窯では同一胎土で、成形方法も同一であり、口縁のみの作りが違うという現象であり、同様な出土例は井林1号窯(注61)や釜ケ洞1号窯(注62)にも認められる。おそらく12世紀後葉（～末）において、白磁椀の影響のもと変遷を遂げてきた山茶椀形態（Ⅰa類）生産期に新たな器種の登場があったものと思われる。このⅠb類は、体部下方に丸味をもち、直線的ないし内彎気味にひきあげられた器形で、口縁の外反がないものである。これらは無釉ではあるが、12世紀後半以後多量に輸入される龍泉窯系青磁碗や、同安窯系青磁碗類（横田・森田分類のともにⅠ類）の影響を直接受けているものと考えられる。無高台皿の出現や、その後の荒肌手山茶椀（藤沢編年山茶碗第6型式）の器形が直線的な体部となることと無縁ではないようである。瀬戸窯における一時期顕著となるこの均質手山茶椀は、中世瀬戸施釉陶器の成立上見逃せない現象と思われる。

5. むすび

山茶椀窯における中国製白磁類の模倣状況をのべてきたが、なかでも玉縁状口縁椀が灰釉陶末期から初期山茶椀窯において、かなり忠実に写されている。それらは、中国白磁の輸入量が多くない段階での生産が主体で、やがて姿を消してしまう。続いて、白磁四耳壺の模倣が12世紀前〜中葉以降、猿投窯とその周辺で始まるが、やがて東山地区と瀬戸南部地区での生産器形に違いをみせ出す。こうした推移は後期院政期から鎌倉政権への移行段階における荘園、国衙の複雑な領域支配関係の中で、揺れ動く在地領主層の窯業生産への介入を示すようである。

東山・知多北部地区での瓦生産が12世紀前半〜中葉に鳥羽東殿等、平安京への供給を行っていたにもかかわらず、1180年代には東山地区で鎌倉への供給瓦を生産しているという事実と、瀬戸南部地区釜ケ洞1号窯灰層上層出土の瓦と同文（同笵の確認ができないが、その可能性が強い）の瓦を知多窯南部の蛭谷古窯で生産している（この期の小型軒先瓦は地方寺院への供給と考えられるが、特に対象寺院として大御堂寺を推測させる）ことは、両者に鎌倉政権と結びつく共通のことがらが潜んでいるのかも知れない。

猿投窯東山地区および瀬戸地区では、ほぼ同時期に白磁碗類の模倣を行っているが、特殊品の生産は主として東山地区で量産されていた。12世紀末に至って構成器種が大きく異なる特殊品が瀬戸地区で始まる。窯業工人集団の移動とその掌握者の変化等土地支配形態を含めて当時の社会背景が大きく反映しているにちがいない。

注1. 亀井明徳「宋代の輸出陶磁・日本」『世界陶磁全集12. 宋』小学館 1977
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館 研究論集4』1978

注2. 楢崎彰一「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『国際シンポジウム新安海底引揚げ文物報告書』中日新聞社 1984

注3. 拙稿「東海地方の灰釉陶器」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』1983

注4. 赤塚幹也「山茶碗」『世界陶磁全集2・奈良・平安・鎌倉・室町篇』河出書房 1957

注5. 赤塚幹也「陶器製作史概説（一）」『陶器講座6』雄山閣 1935

注6. 赤塚幹也「常滑地方に就ての伝説を考える」『陶説』昭28.10月号 1953

注7. 赤塚幹也「古瀬戸」『陶器全集19』平凡社 1966
赤塚幹也「山茶碗の名称と概説」『瀬戸市史陶磁史篇一』瀬戸市 1969

注8. 田中稔「山坏・山皿」『横須賀の遺跡』町史別冊 町史編纂委 1956
田中稔「尾張・三河の陶質土器」『古代学研究17』1957

注9. 久永春男「刈谷市における古窯の分布とその製品の様式について」『刈谷市の古窯』刈谷市市誌編纂委員会 1958

注10. 山茶椀編年研究史については、藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』1982 に詳述されている。

注11. 楢崎彰一「中世窯業の成立と展開」『日本の考古学Ⅵ』河出書房 1967
赤羽一郎「常滑」『日本陶磁全集8常滑・渥美』中央公論社 1977

注12. 注10に同じ。氏は、灰釉段階のものに椀を、中世段階のものに碗を用い、明瞭な区分をしている。本稿は、山茶椀がなお古代灰釉陶からの変遷のうえにあるとする考えから椀の字を用いている。中世施釉陶の中で13世紀末以後登場する天目や平碗などに碗の字を用いるべきかと考える。

注13. 折戸53号窯期の新しい段階とは、楢崎彰一、斉藤孝正による猿投窯編年（『愛知県古窯跡分布調査報告Ⅲ』1983）にいう東山(H)-72号窯期にあたる。

注14. 注2文献に同じ。

注15. 楢崎彰一・斉藤孝正「猿投窯の編年について・編年表」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』愛知県教育委員会 1983

楢崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集ＬＸＸＩＶ』 1978
注16. 注１のうち横田・森田論文
注17. 『平安京跡研究調査報告第７輯―三條西殿跡―』 古代学協会 1983（第30図－８）
注18. 『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1980
注19. 楢崎彰一・斉藤孝正「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要２』1983および注15『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』
注20. 注17 文献に同じ。
注21. 『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』 多治見市教育委員会 1981
注22. 『平安京跡研究調査報告第11輯―平安京左京四条三坊十三町―』古代学協会 1984
注23. 『平安京跡研究調査報告第５輯―平安京左京五条三坊十五町―』古代学協会 1981
注24. 注15のうち楢崎・斉藤文献。
注25. 『平安京跡発掘調査報告―左京四条一坊―』 平安京調査会 1975
注26. 注１亀井論文および亀井明徳「九州の平安陶磁」『愛知県陶磁資料館研究紀要２』 1983
注27. 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白河北殿北辺の調査―』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981
注28. 注２文献および『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅱ）』 愛知県教育委員会 1981
注29. 注27文献に同じ。
注30. 宇野隆夫「後半期の須恵器―平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成―」『史林』 67巻６号 1984
注31. 『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅰ』稲沢市教育委員会 1979
注32. 『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅴ』稲沢市教育委員会 1983
注33. 『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅵ』稲沢市教育委員会 1984
注34. 注15の楢崎文献
注35. 注33文献に同じ。
注36. 注32文献に同じ。
注37. 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』 1984
著者は旧折戸53号窯式期を６段階に型式分類している。
注38. 注10文献に同じ。
注39. 注15文献 P68. 系422, 425など。
注40. 注10, 注37文献など。
注41. 注37および注２文献。
注42. 注３文献に同じ。
注43. 注10, 注37文献に図示されている。
注44. 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅱ』愛知県教育委員会 1981 および『愛知県知多古窯址群』 愛知県教育委員会 1961
注45. 『八和田山古窯跡群発掘調査報告書』三好町教育委員会 1984
注46. 『石浜古窯跡群(1)』東浦町教育委員会 1980
注47. 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ』小牧市教育委員会 1981 および注13文献
注48. 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ』小牧市教育委員会 1984
注49. 『谷迫間古窯址発掘調査報告書』岐阜県教育委員会・可児町教育委員会 1974
注50. 『可児町谷迫間２号窯発掘調査報告書』可児町教育委員会 1978
注51. 多治見市教育委員会による56～59年の発掘調査。『赤坂１号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会 1985
注52. このⅠ類については、模倣玉縁碗の系統ではないとする意見もある。（矢部良明「猿投窯から瀬戸窯へ移行する過程における様式断層」『東洋陶磁1979～83第９号』 1983）
注53. 『尾張国府跡発掘調査報告Ⅴ』稲沢市教育委員会 1983。 同地点では、「国祈（こくりょう）」の刻銘を裏面にもつ風字二面硯（12世紀代のもの）や石帯などを出土している。
注54. 『岩倉市稲荷町・大山寺町 埋蔵文化財調査報告―御土井廃寺・西山古墳―』岩倉市教育委員会 1983
注55. 『天白元屋敷遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 1985
注56. 注30文献。
注57. 平出紀男「白磁四耳壺について」『古代文化35－11』古代学協会 1983
注58. 注１亀井文献。
注59. 注15 楢崎「初期中世陶における三筋文の系譜」文献、井上喜久男「猿投窯から瀬戸窯へ―その作風とと窯の動向―」『特集・宋元の陶磁と古瀬戸』考古学ジャーナル217, 1983
注60. 『南山第２号窯発掘調査報告』瀬戸市教育委員会・瀬戸市水道部 1981
注61. 『菱野団地古窯址群―瀬戸市の古窯第３集―』愛知県住宅供給公社 瀬戸市教育委員会 1970
注62. 『釜ケ洞古窯址群』瀬戸市教育委員会 1978